かめのりコミュニティ
THE KAMENORI COMMUNITY

公益財団法人 かめのり財団は
日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて
未来にわたって各国との友好関係と
相互理解を促進するとともに その架け橋となる
グローバル・リーダーの育成を目的に
事業を行っています

今号の内容

大学院留学アジア奨学生
2021年度証書授与式
新奨学生の紹介・修了生からのことば
特別インタビュー
国際交流から平和をめざして
2020年度緊急支援助成
第15回かめのり賞 募集案内

No.37
JUL.2021

公益財団法人 かめのり財団 The Kamenori Foundation

大学院留学アジア奨学生
2021年度証書授与式

今年度採用の奨学生が決定し、4月3日(土)アルカディア市ヶ谷にて新奨学生を迎える証書授与式が行われました。

昨年度に引き続き、会場に集まる人数を最小限に抑えての証書授与式となりました。会場には新奨学生と現役奨学生、修了生の９名が、またオンラインでは財団役員、選考委員、奨学生 OBOG、そして母国にいる修了生１名が集い、新たに加わった３名の奨学生を歓迎すると共に、修了生たちの新たな門出を祝いました。午後の懇談会では、各自の研究内容をはじめ、現役奨学生および OBOG の近況、選考委員からのアドバイスなど、様々な話題が交わされ、みなで出会いと再会の喜びを共有しながら、貴重な交流の時間を楽しみました。

大学院留学アジア奨学生　新たに３名が奨学生の仲間入り

新奨学生の紹介

Do Thi Thu Huong
ド ティ テゥ フーン
ベトナム
名古屋大学大学院　法学研究科
総合法政専攻　博士後期課程　在籍

「我々を殺さないものは、我々をより強くする。」
フリードリヒ・ニーチェ『偶像の黄昏』

2019年から新型コロナウィルスが世界的混乱を引き起こした結果、私たちは従来の職場・教育・日常生活の在り方を大幅に変更せざるを得なかった。Google統計情報によると、現時点（2021年5月10日）においては、世界中で1.58億人の感染者、及び329万人の死者が確認されている。この数字からいうと、極めて恐ろしい状況が把握できる。しかし、私たちは、人間としてこのような苦境に負けるわけにはいかないと考える。なぜなら、人間というのは、常に苦境を乗り越えて生き延びるために活動し柔軟に変化していくものであるからである。このことは、「この世に生き残る生物は、激しい変化にいち早く対応できたものである」というダーウィンの進化論に明白に反映されている。常に自分の健康、そして社会公共の安全のためだと意識し、適切な行動をとり、このパンデミックを一刻でも早く終わらせよう。

現在私は、名古屋大学法学研究科で知的財産法（特に著作権法）を専攻し、「著作権法における間接侵害」を中心に研究している。また、名古屋大学の法政国際教育協力研究センターで研究協力員として法整備支援事業に携わったり、法科大学院でティーチング・アシスタントとして活動したりしている。新型コロナウィルスの影響で家に引き籠もる時間が大幅に増えてきた。そのため、去年から新しいこと（習字やファッションデザイン等）に挑戦し始め、より鮮やかな日常生活を目指している。

尹 美香
ユン ミヒャン
韓国
早稲田大学大学院　法学研究科
民事法学専攻　博士前期課程　在籍

この度は、かめのり財団の奨学生として採用いただき、誠にありがとうございます。私は、韓国人留学生で早稲田大学法学研究科にて民法学を専攻しています。研究テーマは「日本民法177条における第三者の主観的範囲」です。

例えばひとつの不動産が２人に売却されたとしましょう。通常なら、当事者の意思の合致のみで不動産の所有権は移転されるため、登記の移転は必要とされないのですが、他にも不動産を買い受けた人がいたなら、先に登記を移転した者がその不動産の所有権を取得することになります。問題は、後に不動産を買い受けた人が、先行契約の存在を知っていた場合も、その所有権の取得が可能かということです。これが「民法177条における第三者の主観的範囲」の問題です。既に多くの議論が行われていますが、それに新しい示唆を得ることを目標に、日本・韓国・フランスの三面比較を行うつもりです。

諸国の友好関係と平和のためには、相互理解は欠かせないものでしょう。また私は、法学を始める前の約10年間、日本とフランスでパティシエ・ショコラティエの勉強をしていたために、異なる文化の中で生きてきた人々の相互理解に、お互いの文化や理念の交流がいかに大事か分かっているつもりです。そのために、かめのり財団の理念にも深く共感し、その実践に自分も少しでも役に立っていきたいと、切に願っています。

改めて、採用いただいたことに心からお礼を申し上げます。奨学生として恥のないよう、全力を尽くしていきたいと思います。

金 叙娟
キム ソヨン
韓国
東北大学大学院　文学研究科
総合人間学専攻　博士前期課程　在籍

私は「再生可能エネルギーへの転換における社会的課題」というテーマで研究を進めています。日本と韓国においては、炭素排出問題などが浮上するにつれ、再生可能エネルギーに対する期待が高まりました。特に再生可能エネルギーの中でもメガソーラーを含む太陽光発電は、設置の容易さなどから日韓両国において爆発的な増加傾向を見せてきました。ただ、太陽光発電の設置をめぐって、太陽光が設置される地域で様々な問題が提起されています。その中には経済の論理として還元されない、住民の生活世界の理解を要する問題もあります。この研究を通じて、再生可能エネルギーをめぐる国と住民、企業の認識のズレの解消に少しでも役立てたいと思います。

この度は、奨学生として採用していただき、心より感謝しております。証書授与式でのOBOGの方々からいただいたアドバイスや、他の奨学生との交流は、非常に大きな力になりました。

これから、かめのり財団の奨学生として、研究を含め、日本での生活を有意義な時間にしていくために、努力していきたいと思います。自分にとって当たり前に見える、自明なこととして見える物事を相対化させていくことが社会学で重要とされる姿勢です。この姿勢を研究と日常生活の場面で実践していきたいと思います。

将来的に日韓両国、広くはアジア諸国における相互理解促進において、共通して抱えている環境問題に関する社会学的研究を通じて貢献できるように、研究に邁進してまいります。これからどうぞよろしくお願いいたします。

特別インタビュー

国際交流から平和をめざして

公益財団法人 渥美国際交流財団 常務理事　今西 淳子 氏
聞き手：公益財団法人 かめのり財団 理事・事務局長　西田 浩子

今回は、奨学事業と国際交流事業を２本の柱に、かめのり財団にとってお手本とも言える活動を続ける（公財）渥美国際交流財団の今西淳子氏に、設立時から現在に至る事業の発展や今後の展開についてお話を伺いました。

国際色ゆたかな家庭環境

西田：　私にとって渥美国際交流財団（以下、渥美財団）は憧れの存在であると常々申し上げているのですが、本日は、どうしたら渥美財団のような事業展開ができるのか、そのヒントとなるようなお話を、財団のキーパーソンである常務理事の今西さんにお聞きしたいと思います。

はじめに、ご自身の国際交流との出会いについて教えてください。今西さんがやはり常務理事として関わられているCISV*1のプログラムに、幼少期に参加した影響は大きくありましたか。

今西：　CISVには私の両親*2が長年深く関わっていたので、11歳の時にCISVのプログラムで米国のシンシナティのキャンプに参加しました。でも私自身にはあまりインパクトがなくて、長い間CISVの活動から離れていました。そこで何を得たか、国際交流との出会いがどこにあったのか、自分では分からないですね。ただ海外へ行くこと自体は好きで、高校や大学の夏休みには英語を学びに欧州へ行っていました。

西田：　意識せずともご家庭の中に国際的な環境があったのかも知れませんね。

今西：　父が亡くなり家族の財団を作るとなった時、父は建設業のアジア組織や国際組織の会長でしたので、国際的なことをやろうかと。それとやはり母の父*3が元外交官で、国際的なことを色々やっていた人でしたからね。祖父は２つの戦争に挟まれ世界情勢が複雑だった頃に鹿島建設へ入り、同時に政治家も学者もやるという生活をしていました。渥美財団が今使っている鹿島新館は、その祖父が書斎と迎賓館として使っていた場所なんですよ。

奨学事業からのスタート

西田：　では財団について伺います。渥美財団では奨学事業と国際交流事業を２つの柱に活動されていますが、それは何か理由がありましたか。

今西：　1994年の設立当初は奨学事業だけで、名前も渥美国際交流奨学財団でした。財団の基本財産は鹿島建設の株ですが、１年間の予算額から逆算して、奨学金の額と奨学生の採用人数を決めました。奨学金の額は大きくしたかったので、１年で12人か、２年で６人かで考えた時に、１年間の奨学金にしたのです。博士後期課程の最後の１年間に、集中して論文を書くための奨学金にすればいいかなと思って。それが功を奏しました。

西田：　あと１年あればということで、渥美財団でお世話になり学位を取るケースが多くあるのでしょうね。

今西：　特に文系は３年では学位が取れません。文部科学省の国費奨学金が３年間なので、それが終わった学生からの応募が圧倒的に多い。最近は東京大学や早稲田大学でもフルスカラシップを出しているようですが、それも３年で終わるので応募が来ます。ですから非常に優秀な学生が集まるのですが、当初から想定してたわけではありませんでした。

それと、毎月奨学金を渡す時に奨学生の皆さんに集まってもらうのですが、博士論文の執筆期間は結構孤独で、月に一度会うと、お互い苦労しているのが分かって仲良くなるんですね。それも意図しなかった、よかった点です。

奨学生との交流の始まり

西田：　奨学事業から始めてその後国際交流事業へ展開することは、計画としてあったのですか。

今西：　最初から計画していたわけではないですが、奨学生のネットワークを作りたいとは思っていました。財団設立の趣旨にも、自分の研究以外のことも知って欲しいということを書いています*4。せっかく縁あって知り合うわけですから、１年で終わらないようにしたかった。なにしろ家族で運営しているので、奨学生も家族の一員のようで、夏は軽井沢の別荘でバーベキューをしたり、月例会では私の母も一緒ですし、以前は私の子どもたちも参加したり。１期生や２期生の頃は特にそうでしたね。

西田：　月例会に奨学生を集めることは、最初から決めていましたか。

今西：　奨学事業を始める時に助言をいただき、そう決めました。設立当初、奨学財団を20数件巡って色々と教えていただきましたが、中でも(公財)アジア学生文化協会からは大きな影響を受けました。それまで留学などで海外へ行くと言えば欧州か米国でしたから、アジアとの交流経験がほとんどありませんでした。でも財団が始まり、奨学生の国籍は日本以外どこでもいいとしたら、圧倒的に中国と韓国の留学生が多くて。みんな凄い人たちだとびっくりしました。中国からの留学生は文化大革命後に大学が再開してやっと勉強できるようになった人たち、韓国からの留学生は民主化運動を戦った人たち。皆さん意欲的で優秀で。こちらも若かったので、本当によく飲んでよく話しましたね。

国際交流事業への発展

西田：　そうした奨学生との交流の中から、現在の国際交流事業の中心にあるSGRA*5が生まれたのですか。

今西：　奨学生と飲んで話してという交流を２年３年と続けているうちに、よい関係が出来てい

第５回アジア未来会議 クロージングパーティの様子

渥美国際交流財団　今西淳子氏

かめのり財団　西田浩子

今西淳子（いまにしじゅんこ）

学習院大学文学部卒。コロンビア大学大学院美術史考古学学科修士。1994年に家族で設立した渥美国際交流財団に設立時から常務理事として関わる。留学生の経済的支援だけでなく、知日派外国人研究者のネットワークの構築を目指す。2000年に「関口グローバル研究会（SGRA）」を設立。また、1997年より異文化理解と平和教育のグローバル組織であるCISVの運営に加わり、現在CISV日本協会常務理事。

くのですが、ただ食事の席で話すだけでは続きませんよね。それなら長期的なプロジェクトとして研究ネットワークを作ろうと、設立5年目にSGRAの立ち上げを決めました。財団事務局のある文京区関口からグローバルに彼等の声を発信していこうというネーミングです。奨学支援は年間12人に限られるので、もう少し広く社会に訴えていくことが、この研究会のひとつの意図です。毎週木曜日配信のメールマガジンは現在2700名を超える方々に購読いただいています。

そのうちに、母国へ戻った奨学生がやりたいことを提案してくるようになりました。最初が韓国の（財）未来人力研究院との交流プロジェクトで、日韓アジア未来フォーラムは今年で20年目になります。今、海外拠点プロジェクトは中国、韓国、台湾で実施、フィリピンとモンゴルはサポートの立場で関わっています。

西田：　SGRAがアジアへ広がったことが、アジア未来会議*6へと発展しました。そこへ至るきっかけを教えてください。

今西：　SGRAが順調に進んだことに加え、財団法人から公益財団法人に変わったタイミングで、奨学事業と並べて国際交流事業を強化し、財団の2つの柱としました。財団名から「奨学」を抜き、渥美国際交流財団になりました。それで、いつものように「さあ何をしようか」と奨学生たちと話していたら、第一期生のGさんから「『渥美財団の家族』みんなが集まれる場所を作りましょう」と提案がありました。かつての奨学生も教授になり、その教え子も含めて各国から一堂に集う場所を作ろうと始まったのが、アジア未来会議です。渥美奨学生が「理事長（渥美伊都子前理事長）の子ども」とすれば、教授になった元奨学生の学生は「孫」というわけです。今は幅広い活動をしていますが、コンセプトの発端はいつも「家族」ということですね。

運営の課題、事業の変化

西田：　規模の大きな国際会議を開催するのも大変ですが、継続して行うのはさらに大変だと思います。事業の発展過程では、ご苦労や困難もありましたか。

今西：　走りながら考えるので大変だと思う余裕もなくここまで来てしまいましたが、今思えば、基本財産である鹿島建設の株の配当が低い時期が5年ほどあり、その時は本当に大変でした。奨学生を減らしたくないから、どうやって回して行こうかと。その時に、募金活動を始めました。

西田：　財政面以外で、何か今後の課題はありますか。

今西：　今度、奨学事業が大きく変わります。今年の募集から、日本人も対象になります。27年奨学事業を続ける間に、応募数が半減したんですよね。日本へ博士号を取りに来る人が減ったのか、奨学金が充実して最後の1年が不要になったのかは分かりません。理系では3年で取れる人が増えたのだと思います。同時に、日本人学生が困っていると言われるようになりました。定員を今の14名から16名に増やし、日本人は5名までとする予定です。

西田：　日本人の奨学生が入ってくると、事業も大きく変わりそうですね。

今西：　国際交流事業が変わるだろうと予想しています。これまで国際交流の場では私たち財団スタッフが日本の代表となり、それはおかしいなと感じていました。日本人研究者と一緒にやり始めたら、色々変わるでしょう。

以前、日本人を入れるなら国際関係論の研究者や国際交流に積極的な人がいいのかという議論がありましたが、私はむしろ日本史や日本文学など、あまり海外との接点がない人たちが入ってきて、お互いのビジョンを広げてくれたら面白いかなと思っています。

交流がもたらす世界平和

西田：　最後にお聞きします。かめのり財団では今後の事業を考える上で「人材育成」が大きなテーマとして見えてきたのですが、渥美財団でも人材育成の展望や、育てていきたい専門家の未来像などお持ちですか。

今西：　自分たちが人を育てているという意識はないですね。博士課程最後の優秀な人たちを選んでいるのですから。私たちがその先に見ているのは、より良い平和な社会です*7。国境を越えた人と人同士の平和です。今どきの言葉で言えば多様性の中の調和でしょうか。例えば、東アジアにはまだ様々なコンフリクトが残っていますが、コミュニケーションによりその接点を増やしたいというのが希望です。「国際平和」と日本語で言うとなかなかうまく伝わらないのですが、もう少し普通に対話や交流ができるのではないかなと。

西田：　育成ではなく国際交流に主眼があるということですね。

今西：　渥美財団の交流事業を通じて奨学生の皆さんがより広い経験をすることによって広い視野を持ち、それぞれ自分の活動を通して社会にインパクトを与えるようになることを望みます。それにはそれなりに力が必要ですが、育てているのは私たちじゃない。自ら育つ人に仲間になってもらっているような意識でいます。

西田：　アジアの中でいかに繋がり理解し合いながら、平和につなげていくという、そのための活動でいらっしゃると。渥美財団の大切な視点を、最後に教えていただきました。

＊1　Children's International Summer Villages/国際子ども村　平和で公正な世界の実現に貢献する地球市民の育成を目的に、世界50ヶ国以上の国々で、11歳以上の子どもを集めてキャンプを行うなど、国際教育プログラムを実施している。

＊2　父は鹿島建設元会長でCISV第3代会長の渥美健夫氏、母は渥美財団前理事長でCISV第4代会長の渥美伊都子氏。

＊3　鹿島守之助氏（1896-1975）　外交官としてドイツ、イタリアに駐在。ドイツ時代にパン・ヨーロッパを提唱したグーデンホーフ＝カレルギー伯爵に感化され、パン・アジアの平和を追求した。鹿島建設社長・会長就任中に参議院議員を務めるとともに、研究や著述活動を行う。

＊4　「日本にやってきた留学生が、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思います。」渥美国際交流財団 設立の趣旨について より

＊5　関口グローバル研究会 Sekiguchi Global Research Association　通称SGRA（セグラ）。日本の大学院で博士号を取得した知日派外国人研究者を中心に、地球社会の平和と調和ある発展に寄与する研究を推進する学術交流事業を行い、その成果を会議、フォーラム、レポート、ホームページ等で広く世界に発信。

＊6　日本に留学経験のある研究者、日本に関心のある若手研究者や学生が集まり、アジアや地球社会の未来を学際的・国際的視点から語り合うプラットフォーム。2012年度から各年度にアジア主要都市で開催。2020年1月にフィリピンで開催した第5回は、22ヶ国から約350名が参加。

＊7　「若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道がひらかれてゆくことを願っております。」渥美国際交流財団 設立の趣旨について より

大学院留学アジア奨学生

修了生からのことば

Nguyen Thi Thu Thao
グェン ティ トゥ タオ
ベトナム

早稲田大学大学院　アジア太平洋研究科
国際関係学専攻　後期課程在籍中
奨学金支給期間　2018 年 4 月～ 2021 年 3 月

かめのりのファミリーの一員としていられたこの３年間は、幸せで有意義な期間だったと思います。経済的なサポートだけでなく精神的にも支えてくれたことに、感謝しております。博士課程という孤独な道を歩み始めた頃は、誰にも相談できず、研究のペースも中々つかめず色々と困っていましたが、その時、かめのりファミリーの皆さまから家族のような温かい言葉をかけていただきました。自分が抱えている悩みは、皆さまがいたからこそ打ち明けることができ、そのおかげで勉強に集中できるようになりました。

新型コロナの影響が続いている中、変わらず支えて下さった皆さま、そして奨学金支給業務に携わるすべての方に、心から御礼を申し上げます。あと１年間、できるだけの努力をして卒業し、新たな人生の一歩を踏み出しますが、こうして私を支えて下さった皆さまへのご恩と感謝を忘れず、かめのりファミリーの一員として恥ずかしくないよう、より一層精進して参りたいと思います。

絵本教材『DEZAMA』の紹介

ジャリヤヌソン ジェットさんは、修士論文執筆の傍ら、日本文化を学ぶ絵本教材『DEZAMA』を制作されました。ジェットさんの解説と共にご紹介します。タイトルは、題材となった“デザイン・マンホール”から。

QR コードから PDF 版『DEZAMA』がダウンロードできます。

ある日、町を散歩中に出合ったマンホール蓋のデザインが、地域によって異なることに気がつきました。それぞれのデザインやモチーフを調べる過程で、花や鳥の絵柄が多いことから、「地域の文化や歴史を知ることができる！」との思いを強くしたことが、絵本制作のきっかけでした。教師として授業で使用することを想定し、生徒たちがマンホール蓋のデザインに注目しながら、日本文化の理解を深めることができる絵本として完成させました。デザインを通し、日本に根付いた文化の特徴が学べるこの絵本を、みなさま是非お楽しみください。そしてフィードバックもいただければ幸いです。

Kuy Siemkiang
クイ シェンキアン
カンボジア

大阪大学大学院　言語文化研究科
日本語・日本文化専攻　後期課程在籍中
奨学金支給期間　2018 年 4 月～ 2021 年 3 月

今年の３月でかめのり奨学生を卒業しました。かめのり財団は経済的な面だけではなく、困ったことがあるといつも支えとなるような言葉を優しくかけてくださり、家族のように私のことを心配してくださいました。この３年間、とても温かいご支援をいただき本当にありがとうございました。

財団のご支援をいただいたからこそ、子育てをしながら研究を進めることができました。娘が日本の幼稚園、小学校に通ったことで、私は自分の研究だけではなく、日本の児童教育、初等教育も知ることができ、とても貴重な経験となりました。それらのことを知ることにより、カンボジアの色々な教育問題に気が付きました。これから日本で学んだこと、感じたことを多くのカンボジア人に伝えることができたらと思います。

この最後の１年間は、コロナの影響で母国で研究活動を続けることになり、財団の皆さまにお会いできなくてとても残念でしたが、再会できる日を楽しみにしております。

Jariyanusorn Jet
ジャリヤヌソン ジェット
タイ

埼玉大学大学院 人文社会科学研究科
国際日本アジア専攻　博士前期課程修了
奨学金支給期間　2019 年 4 月～ 2021 年 3 月

かめのり財団の優しいサポートのおかげで、修士課程を無事に修了することができました。振り返ると、皆さんとの貴重な思い出がたくさんあります。

毎月の報告レポートを提出した時、細やかなコメントや応援の返事をいつもいただきました。特にコロナ禍で、健康管理のこともご心配いただきました。外出できず、やる気が出ない時にも、このようにかめのり財団に見守っていただいたことで、温かい気持ちになって心強くなり、しっかりと研究ができました。修士になるための旅では「一人じゃない、後ろにいつも励ましてくれる人がいる」と強く感じました。

また、西田先生、事務の方々、先輩後輩、財団の方々からの助言や応援もあり、充実した研究生活を送ることができました。いただいた温かい気持ちを持ちながら、タイで日本文化教師として日本のことを広めていきます。

この２年間、家族のような尊い支援をいただき、本当にありがとうございました。

2020年度緊急支援助成

かめのり財団は2020年度に、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）という世界規模での非常事態への対応として、「緊急支援プロジェクト助成」および「留学生緊急支援金」の２つの緊急支援助成を行いました。昨年度中に実施した助成採択団体の中間報告会の様子と留学生の声を、ご報告します。

緊急支援プロジェクト助成

この助成では、当財団が実施する、かめのり賞の過去の受賞者と、第11～13回かめのり賞の第２次選考選出者に対象を絞った限定公募を行いました。夏と秋の２回にわたって募集し、助成審査委員会による審査の結果、15団体に総額1,103万円の助成金を交付しました。

2020年10月16日に、夏に採択した６団体を対象とした中間報告会を行い、採択団体より12名が、また当財団からは理事・評議員、助成審査委員が参加しました。報告会は、過去に経験したことのないコロナ禍で、それぞれの団体がどのような課題に直面し、その解決に向けどのように取り組んでいるか等、各団体との情報共有や交流を目的として行われ、参加者からの質問や意見が活発に交わされました。また、各団体への助言や評価などのフィードバックが助成審査委員長の川北秀人氏より共有されました。

採択団体からは、各団体が刻々と変化するCOVID-19の感染状況に応じ、その都度計画の修正や見直しを行うなど、事業遂行の難しさが伝えられた一方、活動地域の地元新聞に事業が取り上げられたことや、事業の受益者がコロナ禍でも前向きな姿勢で各々の活動に参画しているという嬉しい報告もありました。

この中間報告会を経て、現在、各団体より事業終了の報告が順次届いています。昨年の夏ごろは感染拡大状況に一旦の落ち着きはあったものの、その後再度ロックダウンを行う国もあり、多くの団体が必ずしも予定通りに事業を終了できたわけではありません。また、COVID-19収束が見えない状況下で、事業の抜本的見直しや事業継続のための資金調達など様々な課題があるとの報告も受けています。

※詳細は、当財団ホームページをぜひご覧ください。

留学生緊急支援金

2020年７月、助成審査委員会にて支給要件などの確認を行い、18名の留学生に一人当たり10万円の支援金を交付しました。

同年12月には18名全員とオンラインミーティングを行い、事前アンケートを基に、支援金の使い道や現在の大学生活の様子、アルバイトの状況などについて、日本語と英語を交えて、それぞれの思いを自由に話してもらいました。「アルバイト収入が減ったため、支援金を生活費に使った」、「延納していた学費の支払いに充てた」といった感謝の声が上がる一方で、継続的な支援を望む声が多く、その背景には依然として好転しない経済状況があります。中には学生自身や母国の家族の経済的余裕がなくなり、博士課程への進学をあきらめ、日本または母国での就職に進路変更したという学生もいました。

以上の報告と、2021年度も国際交流事業が実施できない状況下を鑑み、当財団では本年度も緊急支援助成を実施します。

第15回かめのり賞 募集案内

かめのり賞は、日本とアジア・オセアニアの若い世代を中心とした相互理解・相互交流の促進や人材育成に草の根で貢献し、今後の活動が期待される個人または団体を顕彰します。

[かめのり大賞]
「草の根部門」、「人材育成部門」の部門毎に正賞として記念の楯および副賞として100万円の活動奨励金を贈呈

[かめのりさきがけ賞]
正賞の記念の楯および副賞として100万円の活動奨励金を贈呈

応募締切は、**2021年8月31日（火）**必着です。
多くの方からの応募をお待ちしております。
詳しい募集要項や応募用紙は、ホームページよりダウンロードできます。

2021年度青少年交流事業中止のお知らせ

諸般の事情を鑑み、今年度の青少年交流事業・海外日本語教育サポート事業の実施を見合わせることにいたしました。詳細は弊財団ホームページをご覧ください。

発行人 ／ 西田　浩子
編　集 ／ 谷本　知子
デザイン／イワブチサトシ
（BUTI design）
印　刷 ／ 佐伯印刷株式会社

日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！
公益財団法人 かめのり財団　The Kamenori Foundation
〒102－0083　東京都千代田区麹町５－５　ベルヴュー麹町１階
TEL：03-3234-1694　FAX：03-3234-1603
E-mail：info@kamenori.jp　URL：https://www.kamenori.jp/